

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593290

研究課題名(和文) 育児休業の取得促進を目指した父親の子育て支援教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the support and education program for father's child rearing. -
Aiming for the promotion of acquisition of paternal child-care leave -

研究代表者

坂口 けさみ (SAKAGUCHI, Kesami)

信州大学・学術研究院保健学系・教授

研究者番号：20215619

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：現在わが国では少子化が大きな課題となっており、その背景には男性である夫の家事育児への関わりが少ないことが指摘されている。本研究は、父親の家事育児行動の実態と育児意識および父親意識を高める要因について実態調査を行うとともに、全国の自治体を対象に父親の子育て支援に関するWeb調査を実施した。さらに、父親への子育て支援教育プログラムを妊娠中および出産後の2回開催し、その評価を行った。

研究成果の概要(英文)：The current low birthrate is a big problem in Japan. Researchers have pointed out the lack of concern regarding childcare and domestic situation may be a factor. In this study, we conducted a fact-finding survey on father's role in childcare and domestic situation, factors which increase father's consciousness of child rearing and paternal behavior. We also ran a web-based survey on municipal support program for father's child rearing. Based on the findings from these surveys, we conducted our support and education program for father's child rearing during pregnancy and after childbirth twice and we evaluated the results of our program.

研究分野：助産学

キーワード：父親 母親 子育て支援 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

2009年我が国の出生数は更に低下し、少子化が加速していることが明らかとなった。この背景には雇用の不安定性や仕事と生活の調和の度合い、育児不安に加えて、父親の育児参加の低さが指摘されている。特に我が国の父親が育児に関わる時間は1日平均48分と諸外国に比較して少なく、またわが国の父親の育児休業取得率は1.23%と低いままである。2010年6月、改正育児休業法が施行され、父親がこれまで以上に柔軟に育児休業を取得できるようになった。しかし我が国においては、父親に対する育児へのサポートや育児参加に関する教育は不十分である。

2. 研究の目的

本研究では、育児休業の取得促進を目指した父親の子育て支援教育プログラムの開発を目的とする。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、研究期間中以下の事柄について検討を進めた。(1) 育児休業を取得した父親およびその妻の、育児休業に対する思いを通して、育児休業取得の意義と課題について質的・記述的に明らかにする。(2) 父親の育児休業取得と育児に関する実態、および意識調査を行う。(3) 父親への子育て支援や教育に関する全国調査を行う。(4) 父親の子育て支援に関する教育プログラムを開発するとともに、子育て教育プログラムを実施し、評価を行い、その有用性について検討する。

4. 研究成果

(1) 育児休業を取得した父親およびその妻の育児休業に対する思いを質的・記述的に明らかにする。:

育児休業を取得した父親及びその妻である母親4組を対象として、育児休業期間中の子育てに対する思いについて質的・記述的に分析し、父親の育児休業取得の意義について検討した。父親の育児休業取得の理由は、【家事や育児をする者が父親である自分しかなかった】及び【職場の上司の理解と欠員に伴う仕事内容が調整できた】ことが上げられた。しかし妻の反応には【出世に響くのではないかという将来への不安】や【金銭面への不安】があった。育児休業中の父親は【母親だけで育児や家事をすることの大変さが身にしみてわかった】や【子どもに関わる時間が増えたことで、子どもとの関係が親密になった】と感じていた。母親は【子育てしている女性の大変さを父親が理解してくれるようになった】ことや【家族全員の関係がより深まる貴重な時間となった】ことを体験していた。以上、父親の育児休業取得は父親のみならず母親や子ども、家族にとって多くの利点が示され、父親の育児休業取得の意義が示唆された。

(2) 父親の育児休業取得と育児に関する実態、および意識調査を行う。:

就学前の子どもを持ち、かつその子どもを保育園に通園させている父親および母親308組を対象に、育児家事行動の実態と育児意識および育児参加を促進する要因について質問紙調査法を用いて比較検討した。平日、休日ともに父親に比較して母親の家事・育児時間は有意に長かった。しかし父親は平日に比較して休日には育児・家事時間が有意に多くなっていた。次に、育児は誰が行うかに、女性の方が適していると考えた父親が母親に比較して有意に多く、そう考える育児家事行動は、そうは考えない父親の行動と比較して有意に少なかった。本調査では、父親の育児休業取得率はわずか2%であったが、出産休暇を取得した父親は全体の1/3に達していた。また出産に立ち会った父親、出産休暇を取得した父親はそうでない父親に比較してその後の家事育児行動は有意に多かった。以上、父親の育児家事への関わりは若干多くなっているものの、さらなる促進を目指すには、出産時から妻や児に関わること、および性別意識を大きく変える必要のあることが示唆された。

(3) 父親への子育て支援や教育に関する全国調査を行う。:

本研究では、父親への子育て支援として、全国の自治体を対象にそこで配布されている父子手帳に焦点を当て、父子手帳の配布状況および内容や工夫している点について実態を調査するとともに、今後の父親にとって活用しやすいような父子手帳のあり方を検討した。調査対象は、全国の790の市、東京都23区、47都道府県の各自治体の子育て支援に関するホームページで計860件とした。このうち、父子手帳を配布している市・特別区は83件(10.2%)であり、これらの自治体を対象として父子手帳の配布方法を調査した。さらに、父子手帳を配布している自治体のうち、自治体独自の父子手帳がホームページ上でPDF文書もしくは電子書籍として全体が閲覧可能になっている自治体は27件(28.4%)あり、これらを対象に父子手帳の名称、記載内容の実態を調査した。自治体での父子手帳の配布方法は、母子手帳と同時に配布されているものの割合が最も高く、次いで両親学級での配布、施設や窓口での父子手帳希望者への配布であった。また、父子手帳の名称については、ハンドブック、ガイドブック、手帳、ノート等、と題されているものが多かった。一方で、斬新な名称や自治体名を父子手帳の名称に用いたものもあった。さらに、27件の父子手帳を調査したところ、その内容は、「出産」、「産褥」、「育児・家事」、「地域の支援・情報」、「健康と安全」、「ワーク・ライフ・バランス」に分類することができた。七つの項目の中ですべての父子手帳に

記載のあったものは「育児・家事」のみであった。また、産褥についての内容は74.1%と他の項目に比べ特に割合が低かった。実際の育児経験者の体験談が多く掲載されている事や、児の成長を記録したり、児へのメッセージを書き込んだりする欄の設置、かかりつけ医療機関などの記入欄の設置、視覚的な効果をもたらすためのイラストや漫画・表の使用、母親のサポートや育児の手順等の詳細な内容の記載などの工夫がみられた。今回のWeb調査を通し、わが国では予想以上に父親手帳が使用されていないことが明らかとなった。しかし父親手帳は、育児に参加するという意識変容へ強くつながるものと考えられる。今後は母子健康手帳と同様に、父親も妊娠・出産・育児について母親と同じように学べることができ、かつそれによって父性意識が高まるような、工夫された父子手帳の配布を積極的期に進める必要のあることが示唆された。

(4) 父親の子育て支援に関する教育プログラムを開発するとともに、子育て教育プログラムを実施し、評価を行い、その有用性について検討する。:

研究趣旨を説明し同意を得た夫婦8組に対して、妊娠9ヶ月頃および産後2~3ヶ月に子育て支援講座を開催した。妊娠期の講座では、「パパとママと赤ちゃんのためのハンドブック」を作成し、妊娠中におさえておきたい6つのポイント、出産時にパパにやってほしい3つのポイント、産後1ヶ月頃までにおさえておきたい6つのポイントを中心に講義とグループワーク、演習を行った。産後の育児期の講座では、「パパとママと赤ちゃんのためのハンドブック - 育児篇 -」を作成し、育児の6つのポイントおよび親になるための心構え5つのポイントを中心に、講義とグループワーク、演習を行った。妊娠中に実施した講座の評価は、講義当日の感想に加えて、出産後の入院中に、妊娠中および出産時の思いや行動についてインタビューを行った。父親からは「出産に向けて心の準備や親になる心構えができた」「他の人の話を聞き、もっとやってあげなければいけないんだと素直に思えるようになった」との意見が聞かれた。母親からは「あの講座の後、パパは家事や掃除など、前よりもよくやってくれるようになった」との意見が大半を占めた。育児期の講座においては、夫である男性が子どもが泣けば普通に抱っこしたりおむつ交換をする行動がみられた。当日の感想でも、母親である妻からは「夫は普通一般の人よりもたぶん、よくやってくれる」「夫婦で育児を楽しんで取り組んでいる」、父親である夫からは「育児はおもしろい」「どう育っていくのか楽しみ」などの意見が聞かれた。

以上、妊娠中および産後の育児期において、計2回の教育プログラムを開催した。特に今回、夫婦で話し合う時間、夫同士で話し合う

時間をグループワークとして入れ込むことで、お互いに情報共有ができ、それが各夫婦の認識や行動変容に大きく影響することが明らかとなった。また子育て支援に関する教育プログラムを展開し、ていねいに関わることが夫婦や家族をより発展させることができる重要な要因となり得ることが明らかとなった。今後、この教育プログラムを定着させることが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7件)

村田諒、佐野紫織、児玉千恵、田中さゆり、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、米山美希、金井誠、市川元基、大平正美、大学生の生活と対人関係および恋愛・結婚に対する意識について、長野県母子衛生学会誌、第17巻、18-25、2015、査読有

徳武千足、坂口けさみ、芳賀亜紀子、近藤里栄、大平雅美、金井誠、市川元基、小林明日香、小木曾綾菜、巢山史織、父親の家事育児行動の実態と育児意識および育児参加を促進する要因について、長野県母子衛生学会誌、第16巻、40-48、2014、査読有

近藤里栄、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、渡邊淳子、金井誠、市川元基、妊娠・分娩・産褥における妊産婦の不安状態の推移および諸要因との関連、長野県母子衛生学会誌、第16巻、22-30、2014、査読有

芳賀亜紀子、徳武千足、近藤里栄、中村紗矢香、鈴木敦子、大平雅美、市川元基、金井誠、坂口けさみ、島田三恵子、産後1ヶ月時の母乳育児の確立と基礎的・産科的要因および母乳育児ケアとの関連性、母性衛生、第54巻1号、101-109、2013、査読有

武井馨世、吉田亜未、佐々木優香、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、近藤里栄、大平雅美、市川元基、金井誠、父親の育児休業取得の意義に関する研究 - 育児休業を取得した父親および母親へのインタビュー調査を通して -、長野県母子衛生学会、第15巻、28-35、2013、査読有

徳武千足、小林佳奈、平野里織、坂口けさみ、芳賀亜紀子、近藤里栄、金井誠、市川元基、大平雅美、生後1ヶ月時を持つ母親の添い寝および添い乳の実態とヒヤリハット経験に関する研究、長野県母子衛生学会、第15巻、20-27、2013、査読有

近藤里栄、塚原照臣、堀綾、和田敬仁、稲葉雄二、金井誠、内田満夫、坂口けさみ、市川元基、野見山哲夫、長野県におけるこにちは赤ちゃん事業取り組みの実態、信州医誌、第59巻3号、169-175、2011。

〔学会発表〕(計10件)

Yoneyama M, Sakaguchi K, Haga A, Tokutake C, Kanai M, Ichikawa M, Ohira M, The effect

of the lecture on support for father's childcare, 第11回 ICM アジア・太平洋地域会議・助産学術会議、2015,7,22,横浜,パシフィコ横浜。(発表確定)

Sakaguchi K, Tokutake C, Haga A, Yoneyama M, Ohira M, Ichikawa M, Kanai M, The relationship between self-esteem and school life, parenthood, awareness of love and marriage among university students, 第11回 ICM アジア・太平洋地域会議・助産学術会議、2015.7.22,横浜,パシフィコ横浜。(発表確定)

小林明日香、小木曾綾菜、設楽咲也香、巢山史織、坂口けさみ、他(8名)夫婦ペアでみた育児家事行動と育児意識および性別意識の関連性、第54回日本母性衛生学会、2013.10.5,大宮,大宮ソニックシティ。

小木曾綾菜、小林明日香、設楽咲也香、巢山史織、坂口けさみ、他(8名)、父親が育児に慣れていくプロセスと父親・母親は考える父親のあるべき姿の検討、第54回日本母性衛生学会、2013.10.5,大宮,大宮ソニックシティ。

巢山史織、小林明日香、小木曾綾菜、設楽咲也香、坂口けさみ、他(8名)、父親の母親に対する情緒的支援行動と関連する要因について、第54回日本母性衛生学会、2013.10.5,大宮,大宮ソニックシティ。

佐藤綾菜、宮坂友香理、大谷真央、本田真弓、山内真理子、坂口けさみ、近藤里栄、徳武千足、芳賀亜紀子、渡邊淳子、金井誠、市川元基、大平雅美、父親の家事育児行動の実態と育児意識について、第53回日本母性衛生学会、2012.11.16,福岡,アクロス福岡。

山内真理子、本田真弓、大谷真央、佐藤綾菜、宮坂友香理、坂口けさみ、近藤里栄、徳武千足、芳賀亜紀子、渡邊淳子、金井誠、市川元基、大平雅美、父親意識を高める要因とそれが母親の育児意識に及ぼす影響、第53回日本母性衛生学会、2012.11.16,福岡,アクロス福岡。

宮坂友香理、佐藤綾菜、大谷真央、本田真弓、山内真理子、坂口けさみ、近藤里栄、徳武千足、芳賀亜紀子、渡邊淳子、金井誠、市川元基、大平雅美、上條陽子、父親の家事育児行動の実態と父親意識を高める要因について、第15回長野県母子衛生学会、2012.11.10,松本,信州大学旭会館。

吉田亜未、武井馨世、佐々木優香、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、近藤里栄、金井誠、市川元基、大平雅美、上條陽子、育児休業を取得した父親およびその妻の子育てに対する思い、第14回長野県母子衛生学会、2011.11.5,松本,信州大学旭会館。

武井馨世、佐々木優香、吉田亜未、坂口けさみ、芳賀亜紀子、徳武千足、近藤里栄、金井誠、市川元基、大平雅美、上條陽子、島田三恵子、育児休業を取得した父親の育児への思い、第52回日本母性衛生学会、2011.9.29,京都,国立京都国際会館。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂口 けさみ (SAKAGUCHI, Kesami)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号：20215619

(2) 研究分担者

芳賀 亜紀子 (HAGA, Akiko)
信州大学・学術研究院保健学系・講師
研究者番号：110436892

徳武 千足 (TOKUTAKE, Chitaru)
信州大学・学術研究院保健学系・講師
研究者番号：00464090

市川 元基 (ICHIKAWA, Motoki)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号：60223088

金井 誠 (KANAI, Makoto)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号：60214425

大平 雅美 (OHIRA, Masayoshi)
信州大学・学術研究院保健学系・教授
研究者番号：50262738

近藤 里栄 (KONDO, Rie)
信州大学・医学部・非常勤講師
研究者番号：20215619
(平成26年度より研究協力者)

島田 三恵子 (SHIMADA, Mieko)
大阪大学・大学院医学系研究科・教授
研究者番号：40262802

(3) 連携研究者

米山 美希 (YONEYAMA, Miki)
信州大学・学術研究院保健学系・助手
研究者番号：90747891

(4) 研究協力者

上條 陽子 (KAMIJO, Yoko)
信州大学・医学部附属病院・看護師長
研究者番号：なし